【現代語訳】 先王の道は，先王が作ったものである。天地のまにおのずから存する道ではない。まさしく先王は，明敏で深遠な知恵の徳によって天の命を受け，天下の王となった。先王の心は，ひたすら天下を安んずることを務めとした。そこで，先王はその心力を労して，知恵と技術の限りを尽くし，この道を制作して，天下後世の人がこれにのっとって行うことができるようにした。どうして（この道が）天地自然に存在するなどということがあろうか。

4 国学と日本文化

▶ pp.174～177

真心と漢意

事しあればうれし悲しと時ときに動く心ぞ人の真心

【現代語訳】 何か事があれば，うれしい，悲しいとその時々に動く心こそが，人の真心というものである。

動くこそ人の真心動かずと言ひて誇らう人は岩木か

【現代語訳】 動くものこそが人の真心である。自分の心は不動だなどといって自慢する人は，岩や木のような無情の存在なのだろうか。

真心を包み隠して飾らひて偽りするは漢（から）の風俗（ならわし）

【現代語訳】 真心を包み隠して，うわべを飾り，偽りをするのは，儒教に教化された中国の習俗である。

（『玉鉾百首』）

漢意の排除（『玉勝間』一の巻）：現代語訳

学問をして道を知ろうとするならば，まず漢意をきれいに除き去らなければならない。漢意をきれいさっぱりと除ききらないうちは，いくら古（いにしえ）の書物を読んで考えても，古代の精神は知ることができず，古代の精神を理解しなければ道は知ることができないものである。そもそも道は，本来学問をして知るようなものではなく，生まれながらの真心のままであるのが道というものなのである。真心というのは，善くも悪くも，生まれついたままの心をいう。それなのに，後世の人は，みな一様に漢意ばかりに染まってしまい，真心を失い果てているので，今では学問をしなければ道を知ることができなくなっているのである。

もののあはれ

【原文】 すべて見る事，聞く事につきて，おもしろしとも，おかしとも，おそろしとも，めづらしとも，にくしとも，いとおしとも，あはれとも思ひて，心の動くは，みな感ずるなり。さて，その物事につきて，よき事はよし，悪しき事は悪しし，悲しきことは悲し，哀れなる事は哀れと思ひて，その物事の味を知るを，物のあはれを知るといひ，物の心を知るといひ，事の心を知るといふ。さればこの物語は，それを知らさむためなれば，よきあしき事を強くいへるなり。

（『紫文要領』巻上）

【現代語訳】 総じて，見ること，聞くことにつけて，愉快だ，風情がある，怖ろしい，愛すべきだ，不快だ，かわいそうだ，感動的だなどと思って，心が動くのは，すべて心が感動しているということだ。そして，その物事についてよいことはよい，悪いことは悪い，悲しいことは悲しい，哀れなことは哀れと思って，その物事の味わいを知るのを「もののあはれを知る」といいい，ものの心を知るといい，事の心を知るという。してみると，この源氏物語は，それ（もののあはれ）を知らせるために，よいことや悪いことを強調して表現しているのである。